

第十九の天関＝京都大学への入学

さて、京大哲学科へ入ったということは、その後の人生の歩みの上から見ても、実に至大の意義を有する (if) であり、もしこの天関の通過なくして、他の道を進んだならば、その後の私の運命は大きく異なったことであろう。そしてそれは、広島高師で、一、二年下級で、私と同時に京大を受けたが入学できなかった某氏は、その後東北大学に入り、爾後教育学者として令名を馳せた例を見ても、もし京大の哲学科へ入らなかったら、私の生涯は大きく異なっていたであろう。

しかるにそれにも拘らず、京大への入試が何処で行われたか等の細部については、全然記憶がなく、受験日が何時だったかすら記憶がなく、唯自信は無かったが外国語はドイツ語で受けたのであった。後日事務の某氏より、入学の成績順位が意外に良かったことを聞かされて驚いたこともあった。独断的で入試に弱い私が、もし可成りな成績で入学できたとすれば、受験問題が所謂「入試的」でなかったためだろう。

当時京大の哲学科はその最盛期を謳歌していて、私らの時は「純哲（純正哲学）」に二十名の定員を五名越えて二十五名の志望者があり、その中の五名は他に廻されたほどであった。これは三木清、戸坂潤などの俊秀が、旧制一高から東大へ行かずこ京大へ来たが為であったが、その他の因となったのは倉田百三氏が西田幾多郎先生のことを書いたことが、その原因となったのである。

かくして当時京都大学の哲学科は、まさに旭日昇天の勢とも言うべく、西田博士の講義の時は大教室が満員であって、他の学部からも助教授級の俊秀が続々とつめかけて聴講した状況は、まさ一代の盛時と言うべく、私もまた終始百五十名前後の聴講者群中の、極微の一微子として聴講したのであった。

ところで序に西田先生の講義のしぶりであるが、先生は普通の学者のように教卓に向かって立されることはなく、長い教壇の上を右から左へ、また左より右へと、常に歩まれながら話されるのであって、普通の教授連中のように用意して来たノートを読まれるのではなく、用意されたハガキのメモをも、ほとんど見られることもなかった。これ先生の講義たるや、沸ふつと泉の湧くように、自由奔放にしていささかの凝滞もなかったのである。即ち先生の講義たるや沸々と湧き出ずる、巨大なる泉の如くであったのである。さればその趣きは、先生の著書を読めばそこにも勿論伺われるも、講義にあつてはその趣きが、一そう顕著なことであった。何となればすでも述べたように、歩々、その歩みに即して語られるが故である。されば今以上を要約して、親しくその講義を聴いた人々の最端的に学んだものは何かと問われれば、それは長い教壇上を行きつ戻りつしながら話された講義のもつ動的流動性と、その著述の上に見られる行文の流動性と、相即性であると言ってよ

い。

さて、それでは他の方々の講義ぶりはどうかというと、田辺元先生の講義は、論厳正正確にして水も洩さぬという趣きであった。だからこれは筆写せねばならぬわけであったが、これに反して和辻教授の講義は非常な美文調であって、一字一句筆写すべしという調子のものだから私は途中で聴講を中止した。何となれば、和辻教授の講義たるや非常に独創的なものだからそのまま書物にされるにふさわしい彫琢^{ちようたく}を極めたような名文であったが、私としてはむしろ、このような独創的な考えの示唆はどうして得られたのか等の話の方が、学問しようとする者にとっては遥かに有益であって、単なる筆写生になることは堪え難く感じたのである。その他の当時の教授方の講義ぶりについては、感想もあるがここでは省かせていただく。何となれば、この「ifミニ自伝抄」は、私が仮りに京大の哲学科に学び得なかったならば、その後の私の運命に如何に影響したか？にその主眼があるからである。

このような点より考えて、当然のことながら教室を初めとして全体の空気が、旧制高校の出身者が本体となる雰囲気^{きふんき}が立ちこめていたことである。これは当然至極のことなれど、私らの様に傍系より入学を許可された身には、何となく肩身の狭い思いをしたことであった。もちろん西田先生が、そのかみ東大にて「選科」として受けられた様な、差別待遇は豪もなかったことは言うまでもないが、しかしどこかに一抹のひがみ根性を抱いたことは事実である。そして「高師から来た者は、どこかに功利的なところがあって……」と、囁かれる声を耳にする毎に、省みて自らそれを否定し得ないものを内省したこともあったのである。

そうした点より、私はいつしか野口恒樹氏と心通うものを覚えるに至った。それは氏が旧制高校はどこの出身であったかは忘れたが、氏が大学以前より、西晋一郎博士の存在と、その思想に対して深い理解をもっていられたが故である。

私らの同期生たる、純哲専攻者たち二十名が、一室に会したことは入学早々より卒業に至るまで、かつて一度も無かったのである。されば互いに顔を見合わせても、それが自分と同期に入った同学の友たることを知らずに了るわけであって、一寸考えれば如何にも奇妙なことなれども、事実はその様であったのである。

同時に、それ故に同じ旧制高校より来た者同士はもとより、上下間もすぐに親しくなるのは当然であった。そこからして京大では、三高（旧制）の出身者が団結とまでは言わずとも、自然に勢をもつに至ったのは当然であって、この現象は当時東大でも見られるたようだ。即ち旧制の一高出身者が、おのずと勢力を持ったのは当然であった。

これだけの事を述べただけでも、私が京大哲学科に入りながら、どことなく片隅に置かれたように感じたのも不思議にはではなかった。いわんや私の場合には、すでに広島高師時

代に西晋一郎、福島政雄の両先生より、魂の「開眼」を受けたが故であろうと思う。されば私にとっては、京都大学入学によって、「天」より与えられた師は、唯一人の西田幾多郎先生と思われたのは当然と言うべし。(それぞれの旧制高校にも、二、三の優れた教授はいられた様であるが、それらの多くは不思議とドイツ語の教授が多かった様である。よって旧制高校より来た人々が、無数の鉄片のごとくに、西田先生という巨大極まりない磁石に吸引せられたのは、もとより当然なり)

同時にこのように考えると、福田夫妻の存在が私にとって、如何に重大なる意義を有するかを深思せざるを得ない。それというのも、爾来六十年に近き現在尚、当時京大の学生中にいた人々のうち、今日に至るまで終始道縁の変わらないのは、実にこの福田氏夫妻の外なければなり。尤も夫君の武雄氏はすでに物故せられて、今は夫人のみが健在であるが、今尚その親交の度は豪も変わらないのである。では何故私が、この福田夫妻との間に道縁が結ばれたかという、私が「野の思想家群」に対して、優れた学者思想家に対し、その「人間」としての生き方の上に、豪も遜色なきことに開眼せられたが故であって、私のかかる考えは、河上肇博士の宗教の導師であった、「無我愛」の行者たる伊藤証信氏に、西三河への赴任が縁となりて結ばれたが、次いで相知ったの福田御夫妻の師たる童安宮崎安衛門氏である。ついで私は江渡狄嶺氏を知ったが、最後に我が国における最深の隠者たる新井奥濠先生についても、広島高師の学生時代より求めに求めても、ついに知り得なかった奥濠先生の遺著「奥濠広録」に廻り逢うことができたのも、実にこの福田氏夫妻の銀閣寺前のお宅であった。

京大の学生時代に同期であった、針宮武雄氏は私と共に、沢木興道師につながる隠れた篤学の士であったが、「行道仏教学」の一書を残されたのみで、早逝せられたのは惜しんでも尚余りあることである。